
東方究極合成獣

三羽鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方究極合成獣

【Nコード】

N9402U

【作者名】

三羽鳥

【あらすじ】

忘れ去られた幻想達が集う楽園、幻想郷。

これは、そんな幻想郷で起きた一つの異変のお話。

とある世界から迷い込んだ、”きゅうきよくキマイラ”の物語。

きゅじゅきょくキマイラ

『きんきゅつじの たいさくマニュアル』

きゅつきょくキマイラが オリから にげだした ばあいは た
だちに

けんきゅつじょの すべての でいりぐちを ふつをするごと。

もし まんがいち けんきゅつじょの そとに にげられたばあ
いは

ぜんりょくを あげて シラをきるごと。

もし きゅつきょくキマイラを みんなに かんじんに みられたばあ

2

……………。

この先は消されていて読めない。

以上、ホワイトボードに書かれた注意書きより抜粋

東方究極合成獣

ここは忘れ去られた幻想達が集う楽園、幻想郷。
外の世界、つまり現実から不要となったモノが自然と引き寄せら
れる結界で隔絶された土地だ。

この地に住んでいるのは人間だけではない。

妖精、妖怪、幽霊、神といった様々な存在が暮らしている。

幻想郷では異変が頻繁に起きるのだが、それでも異変を解決する
巫女やその友人達によって平和が保たれている。

ルールを取り決め、それに則った決闘法　スペルカードルール
を採用することで人と妖怪の関係とパワーバランスを保っているの
だ。

これは、そんな幻想郷で起きた一つの異変のお話。

とある世界から迷い込んだ、”きゅうきょくキマイラ”の物語。

3

……何だコイツ？

それを初めて見た者たちが最初に思ったことはそれだった。

よく分からない妖怪（妖獣？）がいた。

妖怪といっても、幻想郷でよく知られているような人の姿をとっ
ていなかった。

通常、幻想郷の妖怪達は人間に退治され難くなるように、人間を
騙して襲い易くなるように人に近い姿をしている。

でも、そいつは違った。四足歩行の獣だ。

だが、犬ではない。狼でもない。

虎でも、
猫でも、
鼠でも、
牛でも、
狐でもない。
どんな動物にも似ていなかった。

まず、体の色が毒々しい赤紫色だ。これだけで普通ではないと気付くだろう。

その大きく裂けた口は顔どころか体の半分以上はある。
小さいくせにギラギラと不気味に光る目に、背中には吸血鬼のよ
うな蝙蝠の羽がちよこんと生えていて、赤い尻尾の先は槍の穂先
のように尖っていた。

そして、……何の意味があるのか頭の上にはヒヨコが乗っている
のだ。

見るからに凶暴で危険そうな姿で、しかし妙な愛嬌もある独特の
外見だった。

もしも空飛ぶ宝船の異変が起きる前であつたなら、コイツが妖怪
鶴だと言われたら納得したかもしれない。

名前も正体もわからないこの妖怪を、誰かが赤い怪物と呼び始め
た。

……それはとても適切な表現だった。

怪物の定義には3つある。

ひとつ、怪物は正体不明でなければならぬ
ふたつ、怪物は言葉を喋ってはならない
みっつ、怪物は不死身でなければ意味が無い

赤い怪物は正体不明だった。言葉も喋らなかった。そして今まで誰も倒せなかった。

近づく者には誰彼構わず襲いかかったし、その咆哮はびりびりと空間を揺さぶるほどだった。

この赤い怪物の情報は天狗によって瞬く間に幻想郷へと広がった。最初に興味を持ったのは紅魔館の主であるレミリア・スカーレットだった。

「おい、咲夜いるー？」

「はい、何でしょうか？」

レミリアの呼び声に、間髪いれずに返事が返ってくる。

数秒前には誰も居なかったはずのその場所に、瀟洒なメイドは彫刻のように静かに控えていた。

「これよこれ！ 私の手を持ったこれが見えないのかしら」

「……？ 天狗の新聞ですが、何か」

新聞記事を指さすレミリアを見て首を傾げる咲夜。

あの天狗のブン屋が発行している文々。新聞だ。だが、それがどうしたというのだろうか……？

その答えが不満だったのか、レミリアはある写真をばしばしと少しだけ不機嫌そうに叩いて示した。

「コイツよ、この写真に写ってるコイツ」

そう言われて、咲夜は初めてその写真に移った赤い怪物に気が付

いた。

……何だコイツ？

赤紫色の体に大きな口とキバ。蝙蝠のような羽と槍のように鋭利な尻尾。そして頭に乗ったひよこ。……何故ひよこが？

見出しは『謎の赤い怪物！！ 幻想入りした新参妖怪か！？』…。

「……あの、何なのですかコレ？ 妖怪？」

心底不思議そうに問いかける咲夜に対し、レミリアはフンと腕を組む。不敵で素敵な表情です。

そして、何故か得意気に言い放った。

「そんなの私を知るわけじゃないじゃない。だから興味が湧いたの、コイツを捕まえて私の下に連れて来なさい！」

「はぁ……、判りました」

いい暇つぶしの対象を見つけたとばかりにご機嫌なレミリアとは対照的に、どこか乗り気でないような咲夜。

それでも直にその態度は消え去り、ではと一礼の後、レミリアが瞬きをすると彼女の姿は消えていた。

十六夜咲夜は時間を操る程度の能力を持った人間である。

弾幕ごっこであればルールにそったスペルしか使用できないが、そういった制限さえなければ無敵の能力に近い。人間が持てる力の中では破格の能力を所持しているのだ。

まあ、咲夜は普段その能力を掃除や洗濯、料理やレミリアの世話に使っているのだが……。

そして今、彼女は時を止めて咲夜の世界を展開しながら空から地上を眺めていた。場所は妖怪の山の麓近く、紅魔館からはかなり離れている。

見つけた。

小さく息を吸って呼吸を整える。

咲夜の視線の先には、写真で見た通りの珍妙な妖怪がいた。

あれだけ特徴的な外見なのだ、間違いないだろう。というか、あんなのが何匹もいたら困る。

「……………」

音もなく地上に降りると、そろそろと息を殺して近づいていく。時を止めているので意味のない行動なのだが、それに気付かないほど咲夜はその”赤い怪物”に警戒していた。

「なんとというか、結構大きいのね」

写真で見た時にはせいぜい大型犬程度だろうと思っていたのだが、これが意外とデカイ。犬どころか熊よりも大きい。

特にこの大きな口で噛みつかれたなら、咲夜など一口で丸呑みにされてしまうのではないかと思っただけだ。

巨大であるというのは、それだけで威圧感がある。

そして

「……………何なのかしらね、このひよこ」

怪物の頭に乗っかっている黄色いひよこに、咲夜は複雑な表情を

「あああ！！！！！？」

ドップラー効果の悲鳴を残しつつ、ぐるぐるときりもみ回転まで加えてロケットのように、瀟洒なはずのメイドが空の彼方へ飛んで行く。

もはや時間を止め続ける余裕なんて微塵も残っちゃいない。

ああ、何だかギャグ漫画のキャラみたいだと、どこか冷静な頭で考えているのはただの逃避なのか。

これがゲームだったなら、画面端どころか完全に場外にまでぶっ飛んでいることだろう。

咲夜の目からきらりと涙がこぼれ落ちた。

レミリアは紅魔館の自室で紅茶を飲んでいた。

そして、目の前のテーブルの上には文々。新聞が広げられている。分厚いカーテンで光が遮られた部屋は薄暗いが、吸血鬼である彼女にとってはこれが調度いい。

それよりも、今彼女の頭の中を占めるのは新聞に載っていたあの珍妙な怪物だ。

……実にいい。グット！

何と言うか、あの独特の姿と色合いがレミリアの心の琴線に触れたのだ。

あの赤い怪物をペットにして、今度の宴会で見せびらかしたら楽しそうだ。……などと、究極キマイラに首輪を付けて散歩している自分をニヤニヤと妄想している。

もはや手に入れることは前提なのであろう。パタパタと背中が動いていた。

吹き飛ばされて来た咲夜が窓ガラスを突き破り、レミリアへと着弾する数分前の出来事であった。

それからしばらくの間、きゅうきよくキマイラの元には様々な人妖がちよっかいを出しに、あるいは退治しに来た。

究極キマイラは電子制御キマイラ……すなわち機械なのだが、彼女達は赤い怪物が妖怪か妖獣の類だと思っていたらしかった。

幻想郷の住人にとって、科学とは外の世界の魔法という認識だ。それも無理もないのかもしれない。

前回の記事が好評であったことに気を良くした射命丸文は、特集記事を書いて発行部数を稼ごうと大胆に近づいたが、さんざん追い回されて妖怪の山に逃げ帰った。

面白半分近づいた名もない妖精たちは、その大顎で噛みつかれて1回休みになった。

偶然に遭遇したルーミアとミステリアは、何か言う前に丸呑みにされかけた。人間を捕食する側である彼女たちが、逆に捕食されかけたのは結構なショックであつたらしい。暫くは大人しくしているだろう。

十六夜咲夜は永遠亭に入院するそうだ。怪我は大したものではな

いが、念のためということらしい。

機械であるきゅつきよくキマイラは亡霊に死に誘われても何の変化もみせなかった。一緒に付いて来ていた半人半霊の庭師は、半霊を少し喰われて涙目で逃げ帰った。……時間が経てば再生するらしい。

面白半分に力勝負を挑んだ伊吹萃香は、わけの分からない力で空の彼方まで吹っ飛ばされた。鬼の頑丈さ故に無傷であったが、酒に酔っている中でぐるぐると回転しつつ飛ばされたせいで目が回ったようで、ヒドい有様だった。

己の狂気の瞳で操って怪物を利用しようとした月の兎は、狂気などまったく意に介さぬキマイラに耳をかじられてしまった。

人間妖怪を問わず驚かせている奴がいると聞いてやって来た多々良小傘は、きゅつきよくキマイラの咆哮に驚かされて逃げ帰った。

封獣ぬえは自分よりも正体不明な存在がいることを知って自信を無くした。

信仰を稼ぐいいチャンスだと張り切っていた東風谷早苗は、きゅつきよくキマイラを見て何か驚いた後、「アレは反則ですよ！」と戦わずに帰ってしまった。

こうした経緯を経て、妖怪の賢者はきゅつきよくキマイラを排除することを決定した。

今はまだ人里を襲っていないが、もし偶然にでも里に迷い込めばルールなどお構いなしに人間を襲うのは明白であったからだ。

「今回はいつもの異変とは違うわよ、大丈夫かしら？」

「元凶を倒せばいいんでしょう？ やることはいつも変わらないわ」

人里近くの森の中、博麗霊夢と八雲紫は件の赤い怪物 きゆうきよくキマイラと対峙していた。

陰陽玉が夢想封印と同じ輝きを放ち、霊夢の周りを旋回している。両端を可憐なりボンで結ばれたスキマが紫の後部で開き、妖回針が放たれる時を待っている。

そして、すぐにその時は来た。

『グルルルル……！！』

決闘開始のゴングもなければ、スペルカードの宣言もなかった。当たり前だ。スペルカードとは元々宣言用のカード。ルールがなければそんなものは必要ない。

飛ぶ。霊力を宿したアミュレットと、妖力を纏った針がきゆうきよくキマイラ目がけて飛翔する。

攻撃は寸分違わず命中。そのまま数秒間動きが止まり霊夢は一瞬倒したかと思っただが、直後起動音のような音が鳴ると再び動き出した

『ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！』

怒りの咆哮と共に、きゆうきよくキマイラがその口を開けて跳びかかってくる。巨体の割に俊敏な動きだ。

「あぶなっ!?!」

霊夢の張った二重結界と紫の張った四重結界が二人を包みこみ、その巨体を跳ね返した。

だが、結界は明らかに軋みを上げている。

弾き飛ばされたきゆうきよくキマイラは再び跳躍の姿勢に入り、
今にもこちらに飛びかかってきそうだ。その脅威は終わっていない。

「油断しちゃ駄目よ、霊夢」

「ほんと何なのかしらね今日は！ まったく厄日以外の何物でもない」

霊夢はやり切れないように思わず嘆息した。

とある古い大木の上。

きゆうきよくキマイラと霊夢たちの戦闘を見つめる三つの影があった。

その身長はかなり低く、どれも背中には昆虫のような薄く大きな羽がある。

金髪縦ロールのルナチャイルド。

短いツインに八重歯の目立つサニーミルク。

黒髪ロングのスターサファイア。

通称、光の三妖精である。

「ど、どどどどうするのよスター！ あんなのと戦えるわけないわよ」
「しゅ！ 静かにしてよ、見つかるでしょ！！」
「……私の能力で音を消してるから大丈夫よ、多分。というかスターのほうがつるさいわ」

目の前で行われている戦いの迫力に、サニーだけでなく三人（三匹？）とも恐怖していた。

「大体、『最近話題になってる怪物を私たちが倒せば有名に〜』なんて言いだしたのはルナじゃない！」

「でも一番乗り気だったのはサニーよ！」

「そんなこと言って、さんざん私を煽ったのはスターじゃない！」

とうとう三人は、ぎゃーぎゃーと醜い言い争いを始めてしまった。とはいえ、サニーの能力により姿を消し、ルナの能力で音を消している今、三人の姿を見ることの出来る者はいないのだが。

ヒートアップした口喧嘩に、ついにルナが立ちあがって何か言おうとして

『ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

「な!?!」

「うわ!?!」

「きゃ!?!」

その鼓膜が破れんばかりの大音量の咆哮に飛び上がるほどに驚いた。

「うわ……。これ、霊夢さんヤバいんじゃないの?」

見下ろすと、戦いの場所は三妖精たちがいる大木のすぐ下にまで近づいていた。

きゅうきよくキマイラの突撃に対し、紫はスキマの中に身を隠すことで回避する。

目標を見失ったきゅうきよくキマイラはそのまま後ろの岩に大激突を起こすが、すぐに何事もなかったかのように起き上がった。

「ほんと、呆れるほどに丈夫なのね」

宙へ浮き上がった霊夢は内心舌打ちしつつ、霊力を貯め込んだお札と色鮮やかな光を放つ陰陽玉を一気に解き放った。

霊夢の得意技、夢想封印である。

よく見れば夢想封印の合間を縫って紫の攻撃も撃ち込まれている。妖怪退治の力が込められた必殺の一撃が叩き込まれ、きゅうきよくキマイラを中心に爆煙が覆い隠す。

「おお！」

「やったの!？」

「サニー、それはフラグ……」

思わず身を乗り出して喜ぶルナとサニー。もはやただの観客だ。そして、

「霊夢、来るわよッ！」

どこからか吹き始めた風が煙を吹き飛ばすと同時、赤い影が霊夢に向かって一直線に襲ってくる。

巨大な砲弾のように迫るきゅうきよくキマイラは霊夢の張った二重の結界もものともせず、彼女の体を後ろに弾き飛ばす。霊夢の小さな体がごろごろと地面を転がった。

「……！」

いつも余裕そうな顔を崩さない紫の表情が、僅かに歪む。

本来ならば、こんな風に正面切って戦う必要などない。彼女の能力で境界を操ってしまえば済むことだ。

でも、できない。

きゆうきよくキマイラに対して、彼女は境界を操ることができなかった。……西行妖をどうすることもできなかったのと同じだ。彼女の力で操れる範疇を超えているか、もしくはそれ以外の要因があるのか……。

『グルルルル……！！』

きゆうきよくキマイラは、次の標的を紫に変更したようだった。

そのキラキラと不気味に光る目が紫の姿を捉えている。

「……まったく、あなたみたいな物騒な存在がいたら、おちおち寝られないじゃない」

近づいてくる。その足音はずしずしと、地響きのようにも聞こえた。

大木を背にした紫の後方に再びスキマが開く。

それを見てもきゆうきよくキマイラは物怖じしない。それどころか、紫の肉体を噛み砕くべく突撃してくる。

キマイラの巨体と放たれた霊撃が激突する。

拮抗したのは一瞬。そのまま、きゆうきよくキマイラは霊撃を物ともせずに大木に突っ込んだ。

すさまじい衝撃に、樹齢100年は超えるであろう大木がぐらぐらと揺れた。

「これじゃ千日手ね……」

虚空に開いたスキマより紫が現れる。その横には、いつの間にか
霊夢の姿もあった。……その巫女服は僅かに破れているが、大きな
傷はないようだ。

霊夢は複雑な表情だった。

こちらはきゆうきよくキマイラにダメージを与えることができない。
あちらの攻撃は避けることに専念すればどうということはない
が、これはスペルカードルールではない。時間制限など付いていな
いのだ。

内心苦々しい思いだった。

そんな時である。

「きゃあああああああああ!!」

究極キマイラが突進した大木の上から聞こえる悲鳴。

何も見えないその場所から白い服を着た妖精が突然現れ、下にい
るきゆうきよくキマイラ目がけて落下していく。

「ええ!? ちょっと!」

その妖精が時折神社にやって来ては悪戯する三妖精の一人、ルナ
チャイルドだと気付いた霊夢が声を上げる。

背中にある薄く大きな羽を動かすこともなく、頭から墜落してい
くルナチャイルド。

その落下地点はきゆうきよくキマイラの………背中?

「い！」

カチリ！

そのまま重力に従って脳天から落下したルナチャイルドの頭は、きゅつきよくキマイラの背中にあるボタンを押し込んだ。

「あ、づううう~~~~ツツツ！」

痛みで奇妙な声を上げたルナチャイルドは、そのまま目を回して後ろにはたりと倒れ、気絶した。

そして、ボタンを押されたきゅつきよくキマイラも同じようにぐらりと傾き……その動きを停止した。

「え？ えっ？ えええー！？」

「……………な、なによ、それえ……………」

後に残されたのは、あまりにも酷いオチにがくりと脱力する二人だった。

異変が終わり、博麗神社ではいつものように宴会が開かれていました。

しかし、どうやら今回の宴会の主役はいつもと違うようです。

その中心にいるのは、光の三妖精たちでした。

三人の中でも、きゅうきょくキマイラを止めたルナチャイルドは、皆から特に称賛を浴びて嬉しそうにしています。

思っていたのとは違う結果になったけれど、サニーミルクとスターサファイアも、とても満足した様子です。

三妖精たちは、各々がきゅうきょくキマイラを倒すまでの自慢話をしていきます。

しかし、話をする度に彼女達の活躍がどんどん大きくなり、今では正面きっての戦いの末に勝利したことになっているのはご愛嬌。

八雲紫は、少し離れた場所で博麗霊夢と飲んでいました。

話の内容は、きゅうきょくキマイラを今後どうするかについてでした。

「で、あの赤い怪物はどうするの?」

「今は何重にも重ねた封印を施して閉じ込めています。……そのま
まロケットで太陽にでも飛ばしてしまうつもりですわ」

扇子で口元を隠した紫が飄々と答える。しかし、その声には若干
の疲れが滲んでいるように霊夢は感じた。

「あら、幻想郷は全てを受け入れるんじゃないの?」

「ええ。ですが、幻想郷が受け入れても、そこに住む我々が受け入
れるかどうかは別なのです」

少し意地悪をするつもりでの質問だったのだが、紫は淀みなく答
えてみせた。

それに霊夢は小さく「そうね」と同意してみせた。

「それにしても、アイツはいったい何だったのかしらね」

「あんなモノが入ってくるだなんて、ちゃんと結界の管理をしなき
や駄目よ、霊夢?」

「その言葉、そっくりそのまま返させてもらおうわ」

「
……」

結局、きゆうきよくキマイラが幻想郷に迷い込んだ理由は判らな
いままだった。

外の世界で忘れ去られたモノが流れ着く幻想郷。

だが、その地にたどり着くのは幻想だけとは限らないようである。

……少女祈禱中。

きゅつぎよくキマイラ（後書き）

この物語はフィクションであり、単なる二次創作にすぎません。実在する如何なる個人、団体、事件、作品とは一切関係ございません。

まずは原作である2作品について。

“ 東方project（上海アリス幺樂團） ”

“ MOTHER3（任天堂） ”

本作は、以上の2作品を元にした二次創作、クロスオーバーSSとなっています。

どちらも素敵な作品です。

もし、このSSを読んで少しでも興味を持った方がいらっしやるなら、ぜひプレイしてみてください。

この作品を読んでくれてありがとうございます。ありがとうございました。

.....。

「.....あら、何かしらコレ？」

「いえ、玉兔達が訓練中に見つけたみたいでして……」

「また地上の者たちがロケットでも作ったのかしら」

「それにしても……あら、これは……」

きゆうきよくキマイラは完全に停止していたはずだった。
頭に乗ったひよこを除いては。

カチリと、スイッチが入る音がした。

少女祈禱中………？

射命丸文

これは、きゆうきよくキマイラが幻想郷へ迷い込み、霊夢と紫……正確には光の三妖精に退治される前に起こった出来事である。

空は雲ひとつない青空。太陽の日差しがさんさんと降り注ぎ、地上を明るく照らしている。

木々を揺らして吹く風は適度に涼しく、肌に心地よい。

聞こえてくるのは滝から流れ落ちる水音だけ。

遠くに見える煙は、河童の作った工場か何かの施設が吐き出しているものだろう。

ここは妖怪の山、九天の滝。

その滝近くの大岩の上に、一人の少女が胡坐をかいて座っていた。肩までの長さで切り揃えられた白髪に赤の頭巾。山伏（修験者）が着るような衣服。

背中に幅広の片刃の剣を背負い、左腕には紅葉の意匠があしらわれた円形の大盾を付けている。

彼女の名前は、犬走椛。妖怪の山で見回りを任務としている白狼天狗である。

「あふう……」

椛は思わず出そうになった欠伸を噛み殺し、山の麓に目を向ける。妖怪の山はその名の通り多くの妖怪が住む場所だが、特に天狗や河童といった仲間意識の強い妖怪達が集団社会を築いており、幻想郷のパワーバランスの一角を担っている。

そんなお山に好き好んで進入してくる者など、……まあ、あの暢気な巫女かモノクロの魔法使いぐらいだろう。

要するに、彼女はとても暇なのである。

……だが悲しいかな、天狗社会は上下関係が厳しい縦割り社会だ。彼女のような下っ端の哨戒天狗は与えられた任務を粛々とこなすしかない。

何時もであれば知り合いの河童と大将棋でも打つのだが、生憎と今日はどこかに出かけているようだった。

「ふう……」

何か暇つぶしになるようなことでも起きないだろうか？

そんな、山の警備を任された者としてはどうなのかと問いたくなるような考えを浮かべていた時だった。

「……………！」

椀の両耳がぴくりと動く。と同時に、彼女は素早く立ち上がると背中の中の大刀を抜刀して背後に振り抜いていた。

とたんに椀を中心に小規模な嵐が巻き起こり、大玉と小粒の弾が弾幕となって撃ちだされた。風を受けた小石や木の葉も同時に舞い上がる。

しかし、

「あやややや、いきなりコレは酷いんじゃないかしら。」

仕事熱心なのは結構だけど、天狗と進入者の区別も付かないようでは哨戒の任務すら任せられないわよ……？」

椀の弾幕をかき消す一陣の風と共に、一つの影が椀の真横に立っていた。

頭には椀と同じ多角形の頭巾。古めかしそうな団扇。……烏天狗の射命丸文である。

しかし、その服装は椀とは異なり、外の世界の少女が着ても違和感のない洋服だ。

肩には河童の発明したカメラを掛け、胸ポケットには彼女の新聞のネタが書き込まれたメモ帳　文花帖と万年筆が入れている。

「それはどーも。で、烏天狗の射命丸文さんが、一介の下っ端であるワタクシにどんな御用ですか？」

椀の表情と態度はあからさまに不機嫌なものだった。その皮肉を込めた返答に、しかし文はニヤリと笑みを深くする。

「ええ、ええ！　聞きたいならば教えてあげましょう。私がここに来た理由をね……」

そういうと、ごそごそと腰に付けた小さなポーチを探り出す。

そうして文が取り出したのは……彼女の発行している文々。新聞だった。

「これよー！」

「……何ですか。わざわざ貴方の書いた新聞を見せつけに来たんですか？」

顔に突きつけられた新聞を鬱陶しそうに手で退ける椀を小馬鹿にしたように、文はちっちつちと指を振って見せる。……うぜえ。

「わかってないわねえ。私が言いたいのはこの記事に書いてある赤い怪物のことよ。」

前回、この怪物のことを書いた記事が好評だね。部数も伸びたし

今度は特集記事でも書こうと思ったのだけれど、移動しちゃったみたいでどこにいるか分からないのよ。

そこで、椋の千里眼で見つけてしまおうって寸法よ」

正確には、千里先まで見通す程度の能力である。

「……哨戒任務があるのでお断りします」

「待ちなさい！」

くるりと背を向けた椋の肩を、ズビシッという擬音と共に文の手が掴む。

そしてそのまま、無理矢理に正面を向かされる。肩がちよっぴり痛いのです。

「この件は大天狗様だって承知してるわ。“我々天狗がああ程度の妖獣に負ける訳はないが、万が一にでも妖怪の山に迷い込まれては面倒だ”ってね。

だからこれは調査なのよ。面倒なことになる前に博麗の巫女が退治してくれるかもしれないけど、そうならないとも限らないでしょ？

情報は何よりも大事なの。それが分からないほど椋も馬鹿じゃないですよねええ……！」

嘘。ぜってえー嘘だ！

だってアンタ特集記事って言ってたじゃん。

単に独占で情報入手して、今度の新聞大会でいい成績を残したいだけに決まってる。

大天狗様に言われて調査云々というのも、単にそれらしい理由をでっち上げて仕事から逃げて趣味の新聞作りに専念したいだけだろっ……。

面倒臭い。だが、しかし……。

「うづくぐ……。……はいはいはいはい、わかった、わかりました。やりますよ！ やればいいんでしょう！」
「え、本当？ やった、ありがとうね椀。あなたのそういう所好きよ」

逆らえる訳もなく椀が了承すると、文はぱつと花の咲いたような笑顔でにこりと笑った。花と言ってもラフレシアだが。

東方究極合成獣 射命丸文

『ギヤオオオオオオオオツツ!!』

「おっと！」

突撃してきたきゅっきょくキマイラを宙に舞う木の葉のように回避する。

その勢いのままにドスンと地響きを立てて地面にぶつかるきゅっきょくキマイラに対し、文はカメラを構え、その姿を写真に撮る余裕さえあった。

それはまるで闘牛士のショーでも見ているかのよう。きゅっきょくキマイラが標的に向かって体ごと体当たりするしか能の無い暴れ牛であるなら、文は美しいムレータ捌きで観客を魅了するマタドールだろう。

しかし彼女は闘牛士ではない。新聞記者だ。

ならばすることは一つしかない。

「うーん、中々いいアングルでの写真が撮れませんねえ。後ろ姿では迫力に欠けます」

撮影（取材）を開始してから十分程度が経っていた。

撮れた写真はその場で現像。使えるか使えないかをチェックです。実はこのカメラ、撮影した対象に精神的（心理的に）ダメージを与える効果がある。それが河童の摩訶不思議な技術によるものか、それとも単に文の取材がしつこすぎてストレスになっただけなのかは不明だが……。

ともかく、これまで文がきゅうきよくキマイラを撮影しても何か変化が出た様子はない。

精神に重きを置く妖怪にとって精神的なダメージは肉体の傷よりも有効なはずなのだが、……もしや精神がとんでもなく強靱なのか。それとも獣同然であるため、単純に図太いだけなのか？

「しかしこのスイッチ、何なのかしら？」

現像されたきゅうきよくキマイラの写真。その写真に写った背中には、とても奇妙な出っ張りがあった。凸である。

これは……もしや何かを作動させるスイッチ、ボタンなのだろうか？

カメラを構えてファインダー越しに、地面にぶつかって動きを停止したように見えるキマイラに目を向ける。

文はこういうことに詳しくはないものの、河童が作った作品に触れる機会も多い。

だから、その答えに辿り着くのも早かった。

「そうか　　それは自爆スイッチですねッ!」

あやややや!　と驚愕する文。

危ない危ない。危うく好奇心に負けて押すところだった。

自爆装置、それはロケットパンチとドリルに並んで浪漫と呼ばれるものの一つ。そう河童が言っていた。あと山の神社の現人神も言っていたような気がする。

文がうんうんと一人で勝手に頷いて納得していた、その時だった。

ファインダー越しの光景が、真っ赤に染まった。

カメラの故障か、…それとも…何?

「……………こ、れは……………」

数瞬遅れて、文が後方に飛び退く。避ける時に飛び散った空気が地面を切り、その軌跡を大きく残した。

文が避けるのと、大きく開かれたきゅっきょくキマイラの口が閉じられるのはほぼ同時だった。

地面にぶつかって動きが停止したように見えたキマイラだったが、いつの間にか動き出し、文を噛み砕いてしまおうと近づいていたのだ。

あと少しでも判断が遅ければ、文はきゅっきょくキマイラのお腹の中だっただろう。

しかし、そうはならなかった。

幻想郷最速の名は伊達ではない。文が本気になればきゅっきょくキマイラなど鈍足の亀と同じだ。こわくない、こわくない。……………う

ん、大丈夫。

「あややー。そうそう、何も恐れる必要などないのですよ……」

「そう言う文は顔にじっとりと汗をかいていた。心臓もバクバクいってます。」

『グルルルル……!!』

……唸るきゆうきよくキマイラに背を向けないように、文はゆっくりと後退した。

「ま、まあ十分に写真も撮れましたし、後は他の人へ聞き込みでもすれば大丈夫ですね」

「僅かに頬を引きつらせながら、ほらココに、とカメラを確認しようとして気付く。」

カメラが、……ない!?

「あ、あれえー」

『ギヤオオオオオオオオオッ!』

逃げられてばかりの獲物に業を煮やしたのか、きゆうきよくキマイラが咆哮する。じりじりと、文に向かって距離を詰める。だから、気付いた。

「……あ、……あっ！ ああああああっ……!」

文の顔が驚愕に染まる。

頭にちよこんと乗った黄色いひよこ。
毒々しい赤紫色の体。

背中にある蝙蝠のような小さな翼。

顔どころか体の半分はある大きな口。そしてキバ。

そのキバに、文のカメラが引っ掛かっていた。

どろぢらこの追いかけては、まだ続きそうだ。

「プ……くっくくくっくく！」

妖怪の山、九天の滝。

滝近くの大岩の上で、笑い転げている少女がいた。

肩までの長さで切り揃えられた白髪に赤の頭巾。山伏（修験者）
が着るような衣服。

背中に幅広の片刃の剣を背負い、左腕には紅葉の意匠があしらわ

射命丸文（後書き）

二次創作というのは、例えるならばカップラーメンのようなものだと思う。

どんなにおいしいものを作れても、それは所詮カップ麺。

ラーメン屋さんのメニューに並べられるわけではない。

それでも、皆がおいしいと言ってくれるようなカップラーメンにしたいと思った今日この頃。

封獣ぬえ

ここは平和な幻想郷。

人間、妖怪、幽霊、神、その他諸々、主に外の世界で存在が否定されたモノたちが住まう土地である

これは、そんな幻想達の楽園で起こった小さな出来事。

幻想郷にきゅうきよくキマイラが迷い込み、霊夢と紫……正確には光の三妖精に退治される前に起こったお話である。

人里からほど近い場所に、一つの大きな寺がある。

空飛ぶ宝船が変形した寺、その名も命蓮寺。

ここは仏門に入った妖怪達が住まう奇妙な寺であり、その住職も人妖平等をうたい、妖怪を敬う僧侶であった。

故に妖怪寺などと呼ばれているが、それでも人里からの信仰も厚く多くの者が訪れている。

そんな命蓮寺の、ある日の朝のこと。

「うあー」

「ちよつとムラサ、大丈夫？」

清々しい朝の日差しが差し込む命蓮寺の渡り廊下。……そこに響くのはみつともない呻き声。

顔をしかめ、目をしょぼつかせながら歩く水兵服の少女と、黒のミニスカートに黒のニーソックスという絶対領域を完備した小柄な少女。

村紗水蜜と封獣ぬえ。共に命蓮寺に住む妖怪である。

「……やっぱ飲み過ぎたかなあ。うぶっ……」

「そりゃそうよ。だから天狗と飲み比べなんてやめとけって言った

じゃない」

水蜜が調子を崩している原因は、昨日行われた博麗神社での宴会だ。

天狗の口車に乗せられて勝負を受け、見事に撃沈したのである。ぶっちゃけた話、単なる二日酔いであった。

「いや、……でも、もうちょっとで勝てそうだったし……」
「どこが？」

水蜜曰く“良い勝負だった”とのことのだが、どうみてもあの天狗は余裕を残していたように見えた。

そもそも、鬼ほどではないにせよ、天狗という種族は酒豪だ。普通にやって勝てるはずがない。

その言葉に、しょぼんと落ち込む水蜜。ぬえはにやにやと笑っている。

そうして、二人が綺麗に掃除された渡り廊下を歩いている時だった。

「あれ？」

それを見つけたぬえが声を上げる。

部屋の襖が開いたままとなっていた。

「この部屋、普段は誰も使っていないよね？」

「うん、どうしたんだろ……」

水蜜とぬえは顔を思わず見合わせた。

そしてそのまま、二人はわずかに緊張した面持ちでゆっくりと中を覗き込む。

二人が見たのは

「ぎゃあー！ うらめしや〜！」

「あれ……私まだ酔ってる？」

「……………いや」

げんなりとした空気が二人を包む。

視界の先に見えたのは、部屋に置かれている姿見の前で何かのポーズを取っている少女だった。

水色でショートボブの髪。白の長袖シャツと水色のベストに水色のミニスカート。

左目が赤だが、右目が青というオッドアイの持ち主で、左目だけが目立つ色合いであるためか“一つ目”のようにも見えるのが特徴だ。

そして何より目を引くのが、室内であるにも関わらず広げられたままの、茄子のような色合いの唐傘だ。

傘にはぎよろりとした大目玉と大きく長い舌が生え、軸の先取っ手部分には下駄が付いている。

彼女の名前は、

「なんで小傘がここに？」

「さあ？ いつもは裏の墓地にいるはずだけど……………」

傘の付喪神、多々良小傘である。

ぬえたたちが話している間にも、小傘は姿見の前でウインクしたり、あっかんべーでもするかのように舌を出したり、右足を上げてポーズをとっている。

どうやら人間を驚かせる練習でもしているようだ。人を恐怖させるためには努力を惜しまぬその姿勢。

えらいね。凄いね。

だがしかし、その姿を見えても恐怖とか驚きのような感情は一切浮かんでこない。むしろ可愛い。

「というか、……何なのよ、あの頭に乗つけたひよこ」

呆れたようにぬえが目を細める。

小傘の頭に乗つけられた黄色い雛鳥……ひよこの玩具。間違いない、お風呂とかに入れて遊ぶアレだ。

元来の愛らしい容姿のせいでもあるのだが、あの装飾品のせいで怖さなど微塵もなくなっている。

「……………」

流石の水蜜も、何も言えないようだった。冷やかな視線を送っている。

そのまま二人が沈黙していると、鏡に映っていたのだろう。小傘がこちらに気付いたようで、首だけ向けて振り向いた。

目が合う。視線が交差する。

ぬえも水蜜も、気まずさから何も言えないままだったのだが、小傘は何か勘違いしたらしい。

一人納得したように頷いた後、とても得意気な笑みで言い放ってきた。

「うらめしやー、……驚いた？」

その一言にイラついたぬえの三叉槍が、小傘のお尻を狙い撃った。

東方究極合成獣

封獣ぬえ

「うううー、なんて惨いことをするのよ」

痛むお尻をさすりながら、小傘が涙目で抗議する。

心なしか、傘に書かれた目玉も眼つきがキツくなっている。

「むしろこの程度で済んでありがたく思いなさい。ムラサが本調子だったら、キャプテン・ムラサのケツアンカーがスペルカード宣言されてたわよ」

「……私はそんなことしないわよ」

勝手なことを言うぬえの口を、水蜜がぎゅうつとつねり上げた。

おお、伸びる伸びる。

「い、いふあいいいふあいいい！ やめふええええ！！」

じたばたと暴れるその姿に溜飲を下げたのか、水蜜は意外にあつさりと手を離す。ぱちつと小気味よい音がした。

「で、小傘。あなた何であんなことしてたのよ。しかも頭にそんな

ひよこのオモチャまで乗せちゃって」

ひりひりと痛む頬を擦りながら、今さらなことを聞いてみる。

単に人間を驚かす研究だというのなら分かるのだが、あのひよこに何の意味があるというのか……？

「むー」

少し不機嫌そうにしながらも、小傘はミニスカートのポケットを
ごそごそと漁りだす。

そうして彼女は一枚の新聞を二人に突き付けて見せた。天狗の新聞記者が発行しているモノだ。こちらに取材に来たこともあるから知っている。

「えーと、なになに…… 『謎の赤い怪物！！ 幻想入りした新参妖怪か！？』 って何コレ？」

記事の一面、写真に写っていたのは妖獣のような赤い怪物 き
ゆうきよくキマイラだった。

赤紫色の大きな体。その体の半分はあろうかという大きな口。ちよ
よこんと付いた蝙蝠のような羽に鋭利な尻尾。そして、頭に乗った
ひよこ。……ひよこ？

記事を読んでもみると、最近幻想郷で頻繁に目撃されるようになった
妖怪（？）らしい。

幻想郷の各所を放浪しているらしく、あちこちで活動をしている
とか。

この新聞記事と小傘の話をもとめるなら、この正体不明の怪物は
幻想郷のあちこちを動きまわり、人妖を問わずに驚かせているらし

い。

そしてそれを確かめようと小傘も会いに行つたのだが、彼女自信も襲われかけて驚かされて逃げ帰った、……らしい。

「で、自分もその怪物を参考にして、人間を驚かせる新しい方法を考えてたつてことかしら？」

「へっへっへー。そういうことよ」

満足そうに頷く唐傘お化け。ああ、うん。やったね。

どうやら小傘は形から入るタイプらしい。

しかし、まあ……。

「ぶぶぶ……、馬鹿じゃないの？ そんなので人間が驚く訳がない。怖がるどころか笑われて、最後は「それがこのざま」なんてオチになるのが簡単に予想できるわよ。ドツカン、ばっこん、オツペケペー！ってね」

けらけらとお腹を抱えてぬえが笑う。水蜜も同じようなことを考えてはいたのだが、流石に口には出さなかった。だが、そこは封獣ぬえである。わざわざ指摘して小傘の反応を楽しんでいた。

そのぬえの態度に、小傘はかなりご立腹のようだった。

「むうううううううー！」

その、むくれて怒る姿もやっぱり可愛い。やはり怖がられるのは無理だろう。

そう思うと、ぬえの笑いはさらに大きくなっていく。

「な、なによなによ！ それを言うなら、あの怪物はぬえよりもよっぽど正体不明だったわよ！ これじゃあ鶴の面目丸潰れねー！！」

ビシリと傘を付きつける。

正直言つて、悔し紛れの一言だった。だったのだが、それはぬえにかなりの衝撃を与えたらしい。

笑い声がピタリと止み、不敵な表情へと変わっていく。

「へーえ、面白いじゃない。じゃあ私とその怪物のことを確かめてくるわ」

「あ、私はパスね」

間髪いれずに水蜜が答えた。面倒くさそうな空気を一瞬で察知したのだ。

欠伸を押し殺しながら、水蜜はひらひらと手を振りながらぬえを見送った。

「……なんだ、案外あっさりと見つかったわね」

迷いの竹林から無名の丘に抜けた道のすぐ近く、ぬえが探していた珍妙な怪物は見つかった。あんな外見の奴はそうそういない。

今のぬえは自分自身に正体不明の種を植え付けている。正体不明が売りである彼女は、そう簡単に人前に姿を現さないものなのである。

正体不明の種は、見る者の頭の中で理解できる物へ変換して見せる力がある。

つまり、見る者の知識と想像力によって姿形が変わるのだ。

空飛ぶ宝船（と霊夢たちは思いこんでいた）の異変の際、霊夢達には飛倉の欠片がUFOに見えていたのもこれが原因である。

そも、妖怪鶴とはキメラのように様々な動物をごちゃ混ぜにしたような姿であったというが、それも正体不明のタネにより、目撃者が勝手に想像した結果生まれたものだ。

例えば、頭が猫、体は鶏、尾は蛇。

あるいは、頭が猿、体は狸、手足は虎、尾は蛇。

……どれも間違いだ。

彼女はただ、人間たちが怯えて、あれこれ姿を想像しているのを遠くから見て楽しんでいただけだった。結局のところ、彼女は単に人の邪魔をしたり怖がらせるのが大好きな愉快犯だけなのだ。

「うーん、確かにこれは何なのかわからないわ……」

正体不明を保ったまま、そろりそろりと近づいていく。

自分が今、何の姿に見えているかは相手の想像力次第なので不安はあったのだが、きゆうきよくキマイラは動かなかった。

電子制御の機械であるキマイラに、ぬえはどのように見えているのだろうか。もしかしたら何も見えていないのかもしれないし、そのままの姿で見えているのかもしれない。

それよりも、ぬえは目の前の存在の正体を探るのに気を取られていた。

赤紫色の体躯。大きな口。ギザギザに尖ったキバ。鋭利な尻尾。

どんな生物にも似ていない。

いや、頭に乗ったひよことか、背中に生えた蝙蝠（吸血鬼？）のような小さな羽は分かるのだが、それ以外はさっぱりだ。

四足歩行の獣といっても、猫でもないし犬でもない。三角形の耳はあるけれど、それだけで正体は分からない。

「うつつ……」

調べている内に、ぬえは段々と自信がなくなっていくのを感じていた。

コイツはいつたい何なの？

名前は？ 性別は？ 能力は？ 獣？ 妖怪？ 妖獣？

もしかしたら、……自分よりも強力な能力で姿を誤魔化しているのではないだろうか。

目の前にいるきゆうきよくキマイラは動かない。寝ているのか、それとも一時的に機能を停止しているのか。単にぬえのことを探っているのかは定かではない。

それはぬえにとって好都合であるはずなのだが、なぜかそれが苛立たしく思えた。

「この、何か喋るか動くかしなさいよ！」

思わず手に持つ槍の柄を握り締め、軽く頭を小突いてやった。

それが合図となった。

ピキン！

「え、ええ！？」

奇妙な起動音と共に、きゆうきよくキマイラが一気に動きだした。

ような勢いで。

その正体は未確認幻想飛行少女、封獣ぬえである。

「……………た、ただいま……………」

命蓮寺に戻ったぬえはの様子は一言で言うなら草臥れていた。大きな怪我こそしていないが、よれよれの服とぐしゃぐしゃになった髪が哀れを誘う。

背中 of 左右非対称の羽も、心なしかしおれているように見えた。

「あれ、帰って来てたんだ？ どうする、お昼食べる？」

「い、いい。……………部屋で休む」

二日酔いから完全に復活した様子 of 水蜜がひよっこりと顔を覗かせたが、ぬえは断るとふらふらとした足取りで自室へと戻った。

「……………アレ？」

部屋に戻り、そのまま布団に寝転がるうかと考えていたぬえは襖を開けてあることに気付く。

それは、一本の唐傘だった。

部屋の片隅に、趣味の悪い茄子色の傘が閉じたまま立てかけてあるのだ。

その唐傘に、ぬえは見覚えがあった。というのも、

「これ、小傘の持つてる傘じゃない。なんでこんな所に？」

「う、……あ。……………」

状況を理解したぬえの顔が次第に赤くなり、ついに耳まで真っ赤になった。

「じ、じ、じじじ……………！！」

「コケコッコー？」

にやにやと笑う小傘の態度に、ぬえの中で何かがキレた。

「むぎいいいいいい！！ 勝負よ、表に出なさいッ！！」

「上等よ！ お腹も膨れたし、返り討ちにしてあげるわ！！」

……二人の弾幕ごっこは、夕暮れまで続いたという。

ドッカンばっこん。どっとはらい。

……少女祈禱中。

封獣ぬえ（後書き）

当初予定していた話は中止にして。ぬえの話になりました。ちよつと才チが弱かったかな。

鈴仙・優曇華院・イナバ&姫海棠はたて

天文密葬の術が解かれてなお、永遠亭の風景は時間が停滞したかのように緩やかだった。それは、この屋敷を取り囲むようにして存在している竹林がそう錯覚させるのか。あるいは不老不死である月の姫と天才薬師の性質によるものなのかは判らない。

縁側から見える中庭の景色を眺めながら、鈴仙・優曇華院・イナバはそんな無意味な疑問を中断した。中庭から廊下へと吹き抜ける風は心地よく、彼女の長い銀髪をさらさらと揺らしている。

もしも外の人間が彼女の姿を見たら何と表現するであろうか。……美女？ それとも美少女？ いや、その前にこう答えるだろう。

ブレザー姿のウサミミ女子高生だと。事実、彼女の服装は奇抜なファッションの多い幻想郷でも珍しいブレザー服だ。実はこの服装、月の兎の制服（軍服？）なのだが……その話はここでは割愛する。

「あれー、こんなところでどうしたの鈴仙。……サボリ？」

「いきなり出てきて失礼ね。むしろいつも仕事から逃げ出すのはアタタじゃない」

突然聞こえてきた甘い声。振り向くと、ふわふわでぺたんとした兎耳の少女が後ろに立っていた。背丈は低く、まさに幼い子供といった容姿。しかし実のところ、この兎の少女は鈴仙よりもはるかに年上。迷いの竹林が高草郡だったところから棲んでいる最長老だ。

少女の名は、因幡てゐ。永遠亭に住む大量の兎のリーダーである。

「あ、じゃあサボリってわけじゃないんだ。つまんなーい」

「仮に私がサボってたとしたらどうするつもりだったのよ……」

「ひ・み・つ」

にたにたとした笑みで返されたその返事に、鈴仙はあからさまに大きなため息を吐いた。通常、妖怪は長く生きるとだんだんと活動が活発ではなくなるものだが、てゐはその法則には当てはまらない。その気性は妖怪より妖精に近く、彼女の起こす悪戯の被害を被るのは専ら鈴仙の役目である。

「駄目よそんなため息吐いちゃ。幸せが逃げていくんだから」
「私の眼にはてゐが何か悪だくみをしてる幸せクラツシャーに見えるわ」

今日の仕事は何もなし。家事のほとんどは妖怪兎たちがやっているし、置き薬の補充も先日回り終えた。急患などもなければ、師匠である八意永琳からの指示もない。お姫様も盆栽の世話で暇をつぶしている。だから今日はゆっくりまったりと過ごすつもりであった。だがしかし、てゐが何か新しい悪戯でも考えているのであれば、今日の鈴仙に平穩は訪れないのかもしれない。

「まさかまさか。とんでもないウサ」

「だったら私の眼を見て言いなさい」

「目を見て言うのは本当のことを本気で言う時よ」

……この娘、たまに正論言うわね。これではこちらも反論できない。

そもそも、鈴仙の赤い瞳には地上の兎の何倍もの狂気が宿っている。能力を制御しているとはいえ、あまり迂闊に見つめるもんじゃない。

そんな時である。鈴仙の長い耳がぴんと震えたと思うと、彼女は突然に立ち上がって玄関口の方を向いた。

「鈴仙？」

その鈴仙の行動にてゐるは目を瞬かせながら、不思議そうに声をかけた。

「誰か来たみたいね。見てくるわ」

「あ、ちょっと待ってよ。私も行く」

すたすたと早足に歩き去っていく鈴仙に追いつこうと、てゐも廊下を走りだした。

「アナタだったのね。今日は姫様との決闘……じゃないわよね？」

玄関の戸が開けられたのは、ちょうど鈴仙が辿り着いたところであつた。

そこに立っていたのは、腰まである長い白髪にもんぺ姿の少女藤原妹紅である。

「まあね」

素っ気ない一言。それだけ言うと、来訪者は背中に背負っていたそれを振り返って見せてきた。

「あらま、生き倒れ？」

「人間……じゃあないわよね？ 妖怪の生き倒れなんて珍しい」

鈴仙とてゐるが好き勝手な感想を言う。

妹紅が背中に背負っていたのは、長い黒髪を左右で括ってリボンでまとめた少女だった。白のブラウスにチェックのスカート。ニーソックスに一本歯の高下駄という出で立ちだ。多分、下駄をやめて普通の靴を履いてしまえば、これまた外の世界の女子高生と言われなくても見分けがつかないだろう。

「竹林で見つけたんだ。最近は何の赤い怪物がこちら辺をウロウロしてるって話だからな。まあ、後は医者にかかせるわ」

それだけ言って背負った少女を鈴仙に預けると、妹紅はそのまま振り返りもせずに出ていってしまった。

「……うーん。で、どうすんの鈴仙」

「どうするって、とりあえずお師匠様のところまで運ぶわよ」

「そう、頑張ってるね」

「アンタも手伝いなさい！」

どこかへ行こうとしたてゐの頭に、鈴仙はげんこつを落としてやる。

きゃん、と小さな悲鳴を一つ。てゐはわざとらしくそつに頭を押さえた。

「うう、動物虐待ツ、暴力はんたーい！」

「お馬鹿な事を言ってるんじゃないの」

ぶーぶーと口を尖らせ文句を言うてゐを窺めると、鈴仙はこの患者を師である八意永琳の元まで連れていこうと抱き上げた。……意外と軽い。妬ま　いや羨ましい。

「でも、誰なんだろうこの娘？」

「さあ？」

長く生きているてゐは結構な物知りでもある。勿論、この竹林周辺の妖怪や妖精についても把握済みだ。そのてゐでも見覚えがないということは、最近になって幻想郷へやって来た妖怪か、もしくは妖怪の山や地底などに引き籠っている妖怪ということになるだろう。人差し指でぷにぷにと患者の頬つぺたを突いているてゐを無視しながら、鈴仙はそう考えていた。

東方究極合成獣

鈴仙・優曇華院・イナバ & 姫海棠はたて

「うあゝー」

永遠亭の一室で目を覚ました姫海棠はたては、先程から意味のない呻き声をあげていた。

そのその発端は、彼女のライバルである射命丸文が今話題になっている赤い怪物に関する新聞記事を出したことに起因する。天狗社会だけでなく、幻想郷の面々にも比較的好評であったその新聞に對抗心を燃やしたはたては、同じ赤い怪物　きゅっきょくキマイラを題材とした記事を書こうとしたのだ。

が、ここで問題が発生する。それは彼女の念写をする程度の能力である。はたての念写能力とは、彼女の持っている携帯電話型カメラにキーワードを入れると、それにちなんだ写真が見つかるという物だった。判り易く言うと、ネットの画像検索である。

つまり念写で撮られた写真は誰かが既に撮ったもの。この場合、文が撮ったきゅっきょくキマイラの写真をそのまま使ったのと何も

変わらない。はたて曰く「私は記事の内容で勝負する」とのことなのだが、実際にその究極キマイラを見たわけでもない彼女に記事が書けるわけもない。

ならば自分の足で探して見せようじゃないの！ と勇んだのが数日前の話。そして今、彼女はその結果として永遠亭に運び込まれているのである。

「死にたい」

「ちよつと、落ち着きなさいよ」

半ば呆れたような表情で、鈴仙がツツコミを入れた。

「だって、だつてえええ……………」

きゆうきよくキマイラが迷いの竹林にいと突き止め、意気込んで飛び込んだはいいものの。竹林のあちこちに仕掛けられた巧妙な罠に翻弄されてしまったのが3日前。

さらに目的であつたきゆうきよくキマイラを見つけて強行取材を試みたはいいが、逆に襲われそうになつてさんざん追いかけて回されて逃げ出したという苦い記憶。さらにさらに、追い打ちのようにはたてに振りかかる不幸！ ……きゆうきよくキマイラに襲われた時にカメラを落としてしまったのだ。

大量の罠と究極キマイラがいる竹林の中、はたては落としたカメラを探して延々と彷徨い続け、最後には行き倒れていたところを藤原妹紅に拾われたのだ。単純に迷ってしまい、出るにすらなくなっていたというのもあるのだが。

「あゝ、そりゃあまた不幸だねえ」

うんうんと、腕組みしたてゐが何やら神妙な顔つきで同情してい

る。……というか、はたての話に出てきた罫の仕掛け人がコイツだ。紅白巫女や白黒魔法使いがやって来てから、そして烏天狗のブン屋が取材に現れた後になってからはてゐの罫がずいぶんと増えた気がする。

鈴仙がジト目で睨んでやると、てゐは何を勘違いしたのか「いやんっ」と体をクネクネさせた。ウザい。

「ううううう……」

しかしまあ、こうして落ち込んでいる姿を見ると、鈴仙はなんだかはたてが凄くかわいそうに思えてきた。

「と、とにかく元気を出して頂戴。……そうだ、何か食べるものを持って来」

「食べるッ！」

「……………」

だから落ち込まないでと言おうとしたのだが、凄まじい変わり身の早さで即答されてしまった。心なしか、はたての目が輝いている気がする。

……何だか激しく脱力してしまった。取りあえず、朝食の残りでもいいだろうか。

永琳の診察では、単なる疲労と寝不足とのことだった。別に食事の内容には気を使わなくてもいいだろう。

「んぐ、むぐ。ふああむ……………」

卓袱台の上に置かれた食事が一瞬の内に消えていく。サツと残像を残して動く腕が、米粒一つ溢さずに口元へ運んで行った。

行儀が悪いという次元ですらないのだが、もはや鈴仙にツッコむ気力は残っていなかった。まあ一応は患者だし大目に見てやるう。

「そういえばさー、あんたは天狗なんだっけ？ 珍しいね、天狗が山の外のことを記事にしようだなんて」

そんなあのブン屋ぐらいだと思ったよ。とのてあの言葉に、はたては腕をびたりと止めた。

「んむ。それって文のことかしら？ 以前ここに取材に来た烏天狗なんだけど」

「ああ、そういえばそんな名前だったね」

「姫様のところに取材に来て、難題を出されてたわよねえ……」

最後はへ口へ口になって帰っていったっけ。姫様曰く「最後の最後で攻略されてしまった」らしい。

ぶっちゃけあんなの弾幕ですらない。それを攻略できる者がいたことに、あの時は心底驚いたものだ。

「そうそう。うる覚えだけど 金閣寺のナントカ！」

手に持った箸でビシリとこちらを指差してくる。……食べる途中に行儀が悪い。口にもものが入っている状態で喋るのは止めましよう。

「『金閣寺の一枚天井』よ」

新難題「金閣寺の一枚天井」

月の姫、蓬莱山輝夜が滅茶苦茶大きな一枚板を持って来てぶん投げてくるという単純明快にして実に恐ろしいスペルカードである。

弾幕ごっこにおいて、大きな壁というのはそれだけでプレッシャーとなる。そんな天板を両手で支えて持ち上げて、見せびらかすように笑顔で迫ってくる姿は恐怖以外の何物でもない。

魔理沙などは、スペルカード戦で自分の能力を殆ど使わず特殊な道具ばかり見せつけるように使ってくる輝夜を皮肉ってか、『家具屋姫』などと呼んでいた。すぐ飽きてやめたらしいが。

「それだわ。やっぱりここのお姫様の難題って難しいの？」

「まあねえ。『難題』って言うくらいだからねー。……挑戦したいの？」

「やめときなさい、トラウマを植え付けられることになるわよ」
「ふーん」

てると鈴仙の言葉にはたては納得したようで、意外にあっさりと引き下がった。そも、本来の目的は究極キマイラを記事にすることなのだ。それに永遠亭の取材は何時でもできるから、というのも理由の一つだった。

はたては全ての食事を平らげると、最後に湯呑みに注がれたお茶を飲み干す。そして傍に置いておいた頭襟帽をしっかりと被り直して立ち上がった。

「それじゃ、行くわよ！」

「……は？ 行くって、どこに？」

いきなり高らかに宣言したはたてを不審な顔で見る鈴仙。

「失くしたカメラを探しに！」

「ああ、うん。…頑張ってたね」

ひらひらと手を振って立ち去ろうとする鈴仙。そんな彼女の腰を

目がけ、はたてはタツクルでもするかのようにしがみ付いた。

「お願いだから手伝ってよ！ 烏助けだと思ってさあ」

「な、なんで私が！？ ……ちよ、ちよっとてゐー！」

面倒くさいことになる空気を感じ取ったのか、ちやっかり逃げ出すあんちくしょう。

はたては相変わらずひしつとしがみ付いたまま。あ、ちよっと、スカートめくれちゃう…！

「あーもう、わかった！ わかったから！ だから離れなさいッ！」

半ばヤケクソになった鈴仙の叫びが永遠亭に木霊した。

「で、なんで山の外の出来事を記事にしようと思ったの？」

竹林を歩く影が二つ。鈴仙・優曇華院・イナバと姫海棠はたてである。

鈴仙の方はやや不機嫌そうな表情だが、それでも今は普通に会話をしていた。

「そんなの簡単。文の『文々。新聞』に負けたくないからよ。アイツの記事は捏造ばかりでね、被写体は良くても肝心の記事が駄目なの。」

あ、私の新聞は『花菓子念報』^{かかしねんぽう}って言うんだけど、だから私もっと面白くて皆が読むような記事を書こうと思って、外に取材に来たって訳よ」

嬉々として語るはたての様子を見て、鈴仙は彼女に対する評価を改めた。なんだ、結構真面目でいい娘じゃないの。

花菓子念報という新聞など見たこともなければ聞いたこともないが、今度見かけたら読んでみてもいいのかもしれない。

「意外だわ。天狗の新聞は派手さや見た目の面白さばかりを重視した、嘘だらけの記事だから本気にはいけないって聞いてたけど……そうじゃないみたいね」

褒めたはずのその一言に、しかしはたては俯いてしまった。目線が泳ぎ、定まらない。

「う。……確かに新聞大会ではそういう醜聞を扱った記事が人気だけど。でもね、私はそういうの好きじゃないの」

私が人間が記事まで読むような新聞を作ってみせる！

それは文に叩き付けた挑戦だった。記事の内容を眺めることはしても本質を理解する人間などいないと言った文に対し、はたてが宣言した言葉。

かつて家から出ることもなく、念写した写真で似たような新聞ばかり作っていた記者とは思えない台詞である。

「もし、私がそんなまともな記事を書いて新聞大会で優勝すれば、皆の意識も変わるはずでしょう？ だから私は、人間がしっかり記事まで読むような新聞を作りたいのよ」

「へえ……」

楽しそうに語るはたてを見てみると、自然と鈴仙の顔にも笑みが

浮かんでいた。

初夏の日差しを喜ぶように萌えている緑。真新しい竹の葉がさらさらと揺れながら音を届けてくる。普段はじりじりと肌を焼くような太陽の日差しも、この竹林が適度に遮ってくれていた。

まるで二人仲良く散歩でもしているかの様な錯覚さえしてくる。そんな時であった。

「ストップよ！」

急に鈴仙が叫んだ。鈴仙よりもやや前を歩いていたはたては、彼女に体ごと後ろに引き倒される形となった。頭こそ打たなかったものの、少しぶつけたお尻が痛い。

「な、何なのよもう。ビックリしたじゃない……！」

「……」

問い詰めるようなはたてに、鈴仙は鋭い眼光で“それ”を指差した。

「じ、……それは……」

「てゐの仕掛けたトラップね。これに引っかかると、上のタライが落ちてくるようになってるわ」

それは、竹と竹の間に張られた一本の凧糸だった。その先を辿れば上まで続いており、そこには怪しげなタライが複数垂れ下がっていた。

竹林で迷っている間、はたても嫌というほど被害にあった罠である。致命的な外傷こそ受けられないものの、悪戯としてはこれ以上ないほど優秀なものだ。

「うわ〜」

「気をつけてね。あの娘のことだから悪戯レベルだとは思っけど…」

言いながら、ひょいと糸を跨いで一步先に進む。その足元でカチリと音が鳴った。

鈴仙の顔が青ざめるのと、はたてが顔を引き攣らせるのは同時であった。フラッシュのような眩い閃光と耳をつんざく爆音と爆風の三連コンボ。土と小石が舞い上がり、煙が辺り一帯を包み込む。

「……思っけど、時々シャレにならないものがあるから」

「よく分かりました」

煙が晴れ、火薬の臭いが立ち込めるその場所に棒立ち状態で突っ立っている鈴仙。服が焼け焦げ、髪がボサボサになり、耳がしおれているものの目立った外傷がないのはギャグ補正によるものだろうか。

アレの被害を受けたのが自分だったらと思うと、はたては同情する気が失せていくのを感じた。

その後も、てゐの仕掛けた罠のせいで二人は散々な目にあった。ある時は、上からゴロゴロと転がり落ちてくる丸太の大群……。

「きゃー……！！ って、これ空飛べば回避できるわね」

ある時は、丈夫な縄で簀巻きにされて吊り上げられ……。

「おーろーしーてー！」

「ま、待ってなさい。……か、固い！？ 何でこんなに丈夫に作っ

「であるのよ!？」

ある時は、脱出不能の細い落とし穴から首だけを覗かせることになり

「ど、どうやって助ければいいのー!？」

「あ、痛い! 耳い! 耳を引っ張らないでー! 足が引っかかって飛べないのよー」

ある時は、降って来た竹槍の束に肝を冷やし……。

「ぎよええええー!」

またある時は、ベトナム仕込みのスパイクボールが……。

「いい加減にしてー!」

「何これ!? 何ー!! いつからここはベトナムになったのよー!」

「ふ、普段は人間どころか妖怪も立ち入らない奥地だから、……まさかこんなにデンジャラスな魔境だったなんてね。てゐの奴……」

先程頭上から降って来たネットをすっぽりと被ってしまい、イモムシのようにもぞもぞと這い出したはたてが半泣きで叫んだ。鈴仙もあまりの超展開に魂が抜けかけている。

永遠亭と人里を結ぶ道から外れた竹林の奥地。成程、これならば天狗であるはたてが3日も迷ったのも無理はない。

よるめきながらはたてが立ちあがる。しかし足元が覚束なかったせいか、それとも一本歯の高下駄が災いしたのか、足元の石に蹴躓

いてしまった。しかも鈴仙にしがみ付いた状態で。

「え！？」

「ちょッ！」

不運なことに、目の前は急斜面となつてい場所だった。そこをはたてと鈴仙は一緒に滑落する。ドシャツ！！と滑り落ち、ぶつかる異音と小さな悲鳴が竹林に響く。

「いッ……たあああ、あ、あ、あ！？」

「う、うきゅー……」

もはや踏んだり蹴ったり。泣きつ面に蜂、弱り目にたたり目である。

しかしそんな時だからこそ、不幸中の幸いというのがあるのかもしれない。

「あー！！」

はたての視界の端に映つた物。外来人の持つ携帯電話によく似た外見のそれは見間違はずもない。自分のカメラであった。

素早くそれを掴み、開いて機能を確認する。……うん、壊れてない。流石は河童製の特性カメラ。防水機能はばっちりだ。

「やったわ！ 見つけた、見つかったー！」

「……………」

ないたカラスがもう笑つたとはまさにこのこと。喜色満面の笑みでガッツポーズまでするはたての喜びようは、これから踊りだすのではないかと思うほどだ。

「うづうづ、これでお家に帰れるわー。帰ったらお風呂に入って、すぐに休もうっと……鈴仙？」

「……………」

そう言えば、さつきから鈴仙が一言も言葉を発していない。まさか、何か酷い怪我でも負ったのでは！？
不安に思ったはたては後ろを振り返り

『グルルルル……！！』

目の前にまで迫っていた恐怖にはたての体がピシリと固まった。

「……………」

「……………」

赤紫色の大きな体。その体の半分はあろうかという大きな口。ちよこんと付いた蝙蝠のような羽に鋭利な尻尾。そして、頭に乗った黄色いひよこ。

取材をしようと試みて、結果襲われて散々追い回された記憶が蘇る。赤い怪物 きゆうきよくキマイラだ。

「……………下がって」

「れ、鈴仙……！！」

はたてを庇う様にして、鈴仙が一步前に進み出る。その瞳は通常よりも赤く染まり、月の狂気に満ちている。

そして彼女は語りだす。静かに、余裕を持って。

全然効いてなかった。耳を半分かじられて、鈴仙がたまらず悲鳴を上げる。

そして聞こえるシャッター音。はたてがカメラを向けていた。連射機能で差分もバツチリ。

「鈴仙！ いい感じッ！ こっち向いてー！」

「撮ってんじやなーいーい」

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！』

背中の小さな翼を伸ばし、きゅうきょくキマイラが飛びかかって来る。

「「うぎゃー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」

意外と余裕のある二人であった。

……少女祈禱中。

鈴仙・優曇華院・イナバ&姫海棠はたて（後書き）

数日後、発行された花菓子念報の一面には、きゅうきよくキマイラに耳をかじられ襲われる鈴仙の姿がでかど載っていた。

「恩を仇で返された」

「汚いなさすが天狗きたない」

そこには、だばーと滝のような涙を流す鈴仙と、トラップの件で怒られたのか頭にしこたまタンコブをこさえたての姿があった。うな。

……少女祈禱中。

ルーミア&ミステリア・ローレライ（前書き）

東方究極合成獣、これまでの三つのあらすじ。

一つ、幻想入りしたきゆうきよくキマイラを射命丸文が取材！

二つ、多々良小傘の話聞いた封獣ぬえが、きゆうきよくキマイラと接触！

そして三つ！ 姫海棠はたてが取材途中で竹林で遭難、永遠亭で保護される！

ルーミア&ミスティア・ローレライ

黄昏時。昼と夜の境界線に位置するこの時刻、人里の人間たちは早々に家路に着こうとする。

幻想郷の夜は早い。人工の光によって照らされる夜を忘れた外の世界とは違い、頼りになるのは月と星の明かりしかない。夜の時間は妖怪の時間。月の光は普段は見えない筈のモノも照らし出す。妖怪にしてみれば人間を襲うのに絶好の機会なのだ。

だから人間にとって、夜は恐怖の時間となる。………だが、時には例外もあるようだ。

「夜の鳥い、夜の歌あゝ。人は暗夜に灯を消せ」

人通りの少ない夕暮れ時の道。人里からも離れたその小道に、紅い提灯が一つ灯っていた。

灯りの元に近付くにつれて奇妙な歌声が聞こえてくる。

「夜の夢え、夜の紅」

近づいてみると、そこにあるのは一つの屋台だった。暖簾には八目鰻と書かれており、酔っぱらいの笑い声と共に、炭火で串を焼く音と美味しそうな臭いがこちらまで漂ってくる。

「邪魔するぞ、ミスティア」

「人は暗夜に磔を喰らえ」 ……あ、いらっしやい慧音さん！
と、……誰かしら？」

客の存在に気がついたのか、先程までご機嫌そうに歌っていた少女が歌を中断して迎えてくれる。

背中羽と、頭に被った帽子にまで羽飾りが付いているのが特徴的なこの少女の名はミスティア・ローレライ。歌と闇で道行く人を惑わす夜雀の妖怪である。

ミスティアの屋台は八目鰻の屋台だ。鳥の妖怪である彼女は、焼き鳥撲滅を目指してこの屋台を始めたらしい。

最近では八目鰻の他におでんやお酒のツマミだとか、山菜のテンプラだとか、八目鰻以外の魚や野菜や獣などを食材とした料理も出している。中々に繁盛しているようで、屋台の横には簡素な長机と椅子が並べられており、その長机もすでに先客で全て埋まってしまっていた。そこには知っている顔も居れば知らない者もいる。

「あ、その……こんばんわ。阿求です。稗田阿求」

上白沢慧音の背後から頭に一輪の白い花飾りをのせた可憐な少女がひょっこりと顔を出す。身にまとった鮮やかな色合いの着物と相まって、その姿はとても愛らしく美しい。

九代目阿礼乙女、稗田阿求である。

人間の里でも伝統ある家系の一つで、彼女はその稗田家でも特別な御阿礼の子だ。

御阿礼の子は転生の術を会得しており、自分が死んでも百数十年後には生まれ変わるようになっていく。だが、その代償として短命であり、その寿命はほんの三十年程度。生きている内から転生の準備を行わなければならない、死後も閻魔の下で百年を働くことで転生後の肉体を用意してもらうのだ。……つまり普通の人間としての生活は殆ど送れない。

どうしてそんな不自由なことを続けているのかと言えば、それは偏に幻想郷縁起の編纂のためである。

千年以上前。歴史を創る人間の居ない閉ざされた世界である幻想

郷において、人間は妖怪の実態も判らずただ怯えて日々を過ごすしかなかった。そんな人々の生活の安全を確保するため、一代目阿一は妖怪の能力や対策を纏めた書物を作った。それが『幻想郷縁起』の始まりだ。

初代阿一から始まった縁起の編纂は、阿爾、阿末……と転生を続け、現在の九代目阿求として生まれ変わった今も続けられている。

とはいえ、幻想郷のあり様はここ百年余りで大きく様変わりした。人間と妖怪の距離は近くなり、『妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治する』という関係も形骸化してきている。今では妖怪が人間の里に遊びに来たり、このミステリアの屋台のように妖怪のお店に人間が通う光景もそう珍しいものではなくなった。何せ悪魔の家に人間が呼ばれされたり、襲った（驚かした）人間をキャッチアンドリリースする妖怪までいる時代なのである。

そんな変わってしまった幻想郷を……意外や意外、阿求はすんなり受け入れ楽しんでるようである。

何故なら、こうして人妖の距離が縮まったことで妖怪の友人や知り合いが出来たのだ。例え彼女が死後百数十年を地獄で過ごそうと知っている人間が皆死んでしまっても、妖怪は同じ顔ぶれに出会うことができるからである。彼女は現状に満足し、その中で幸せを見つけているのである。

……話を戻そう。

そんなわけで、あまり人里の外に出歩くことのない阿求だが、今日は慧音に連れられてミステリアの屋台にやって来ていた。慧音なりに阿求を気遣ったということなのだろう。

「そう、ウチは初めてのお客さんね。あつ、ルーミアー！ ちょっとそこ詰めてあげてくれない。この二人を座らせてあげて」

「あーうん。いいよー」

横の長机の方には座れないと判断したのか、ミスティアのその言葉に屋台側に座っていたルーミアが席を詰めて空けてくれた。そのままルーミアの横に慧音が、その隣に阿求が並んで座る。こういった店は初めてなのか、それとも妖怪の屋台だからなのか。阿求は少し緊張した様子だ。

「で、何にする？　　うちは八目鰻の屋台だけど、最近は色々やっているからねー。あ、でも焼き鳥は駄目よ？　　というか鳥肉は絶対駄目」「えー、鳥のお肉もおいしいんだけどなー」「ルーミアには聞いてないわよ。それに、何を言われようと鳥肉は扱わないわよ」

酔っているのか、それとも単に頭が足りないのか。間延びした声で言葉を挟むルーミアに慧音と阿求が苦笑する。

「ん、……とりあえず日本酒を貰おうか。あとは何か一品、そちらに任せよう」

「あ、じゃあ私もお酒と八目鰻を一つ」

「あいよー！」

威勢のいい返答。ミスティアは屋台の下から一升瓶を取り出すと二人にグラスを渡してそのまま注いであげた。そうして今度は八目鰻に取り掛かる。既に注文していた客がいたのか、既に何本かの八目鰻や兔肉の串焼きがジウジウと音を立てて焼き上がっていた。ミスティアは手早く串を返しながら、新しい八目鰻に串を通して炭の上へ置いていく。

「おまたせー！　　兔肉と鰻、焼きあがったわよー」

丁度良い頃合いに焼き上がった料理を載せ、ミスティアが屋台の横の長机に皿を運んで行く。まだ熱々で脂がしたたり落ちている串焼きの登場に酔っ払いたちが歓声を上げ、やんややんやと囃し立てた。

それを横目で眺めながら、阿求はぼつりと言葉を零す。

「ちょっと、驚きました」

「ん？」

「この屋台です。天狗の新聞で噂になっていたから存在は知っていませんけど、こんなに繁盛してるなんて。……やっぱり実際に来て見ないと、こういうった空気は判りませんね」

「……ああ、そうだな」

辺りに響くミスティアの奇妙な歌と客たちの笑い声。すっかり出来上がった赤ら顔でわいわいと騒ぐ者もいれば、静かに飲んで食って楽しむ者もいる。そこに人間と妖怪の区別はない。博麗神社の宴会と似ているようで、どこか違った雰囲気だった。

人がいて、妖怪がいて。共に同じ場所で酒を飲む。それはとても平和で、穏やかで……何と云うか、こういうのも悪くない。

阿求はグラスを両手で持ちながら、ちびちびと酒を呑んでいく。

「そろそろ新しい縁起を纏めようと思っていたので、その時にミスティアさんの項目に追加しないとイケないかもしれませぬね」

とはいえ、ミスティアも立派な人喰いの妖怪。油断は禁物との注意書きは欠かせないだろう。妖怪が人間を襲うという部分は、縁起を読んだ人間が勘違いしないようにやや強調して書かなければならない。妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治する。擬似的にでもこの形がなければ、今の幻想郷は成り立たなくなってしまう。

「そうなのか？」「そーなのかー」

何故かルーミアも合いの手を入れた。

「ええ、最近は新しい妖怪も増えてきましたから」

「ああ。そういえば、ここ数年で見たことのない妖怪もよく目にするようになったな」

妖怪の山に引越してきた神社の事情を聞けば分かるように、外の世界では妖怪や神の存在が次から次へと忘れ去られている。

それは幻想郷の中では妖怪の力が強くなるということであり、これから先、もつと妖怪の数が増えていくということだ。

それ以外でも、これまで交流が断たれていた地底の妖怪であったり封印されていた僧侶が現れたりと実に様々。

……そういえば、永遠亭もあの異変が起こるまでは人里にその存在を知られていなかったのか。

幽明の境は薄くなり、月や地獄との繋がりが深い者たちも出てきた。こうなると、どこからどこまでが幻想郷と呼ぶべきなのか分からなくなってくる。

「でも、過去の異変を振り返ってみて思ったんですけど……」

「何だ？」

「純粹な意味で“幻想郷の中の妖怪”が起こした異変って紅霧異変しかないんですよね。春が来ない異変は冥界の人たちが起こしたものですし……」

紅い霧が幻想郷中を包んでしまった紅霧異変。

首謀者は紅魔館の主、吸血鬼レミリア・スカーレット。……これは問題ない。

幻想郷に春が来なくなつた春雪異変。

異変の元凶は西行寺幽々子と魂魄妖夢。彼女たちは冥界の住人だ。今でこそ気軽に行き来しているが、本来ならば冥府の結界によって簡単に行き来することなどできない。

夜が明けなくなり、夜明けが訪れなかった永夜異変。……これは慧音自身も関わつたのでよく知っている。本物の満月を隠し、偽物の満月と入れ替えてしまつた異変だ。

異変の犯人は八意泳琳と蓬莱山輝夜。……月の民であり蓬莱人とはいえ、彼女たちは人間に分類していいだろう。幻想郷の人と妖怪の関係に当てはめるなら、あの二人は人間側であるはずだ。

ただ、阿求たち人里の人間はこの異変の顛末を詳しく知らない。原因や犯人について、霊夢が曖昧にしか語らないからだ。

幻想郷が花で埋め尽くされてしまつた大結界異変。

この異変は……異変と呼んでいいのだろうか？ 増えすぎた死者の魂が冥界に渡れずに幻想郷に取り残され、途方に暮れた靈魂達が身近な花に身を寄せたあの異変。

特に実害もなければ、時間と共に解決するものであつた。

妖怪の山に神様が神社ごと引越してきたことで起こつた異変。

異変を起こしたのは妖怪ではなく神、八坂神奈子。元々幻想郷にいたのではなく、外から来た故に起きたゴタゴタだ。

間欠泉から怨霊が湧きだした異変。

間欠泉の原因は地底で起きたことだ。そして霊烏路空は地底の妖怪。“幻想郷の”妖怪が起こした異変ではない。

空飛ぶ宝船の異変も……、異変を起こそうとしたわけじゃなく、単に封印された魔法使いを復活させようとしただけ。その場所は魔

界。件の魔法使い　聖白蓮を慕っていた妖怪たちも元は地底に封印されていた者たちだ。

そして神霊の……、

「ストップだ。それ以上はもういいから……」

グワシと阿求の華奢な肩を掴み、それ以上の思考を遮るためにあえて口に出して言う。これ以上はあまり触れない方がいい。そう思った。

しかしまあ、言われてみればその通り。

博麗大結界によって外界と隔離されてから約100年。それまで幻想郷には何の異変も変化もなかった。それが崩れたのは、幻想郷に吸血鬼がやって来たことで起きた『吸血鬼異変』が原因だ。

その異変の後、巫女と気力の残っていた妖怪の間で協議が行われ、擬似的に命を掛けた戦いが出来る遊び　スペルカードルールが制定されることとなったのだ。

妖怪同士の決闘は幻想郷を崩壊させる恐れがある。だが、決闘がなければ幻想郷の妖怪はいずれ力を失ってしまう。それを防ぐために考えられたそれは、完全な実力主義を否定して美しさを競い合うという形式の決闘方だった。

これにより、幻想郷の妖怪が異変を起こし易くして、人間が妖怪をより退治し易くなったのだ。……しかし考えてみれば、積極的に異変を起こした幻想郷の妖怪はレミリア・スカーレットだけである。

「うん、まあ……。異変の時に巫女にちよっかいをかける妖怪は少なくないようだし、それでなくとも普段から弾幕ごっこは行われているんだ。妖怪の力が無くなるのを防ぐという目的は達せられているんだろっ」

どちらかといえば自分に言い聞かせるようにして、慧音は力強く頷く。と、そこに響くミスティアの声。

「おまたせ！ 八目鰻、焼き上がったわよー」

炭火で焼かれる八目鰻の串に手を伸ばして、阿求の目の前の皿に熱々の八目鰻を置く。

阿求も話を中断し、出された鰻に目を向けた。おずおずと手に取り、火傷しないように注意しながら口にする。

「あ、……おいしいです」

「そう？ ありがとね。ルーミアも、はい！ お待ちかねのお肉よ」「やったー」

阿求へ八目鰻を渡すと、今度はルーミアに肉の串焼きを差し出した。よほどお腹が空いていたのか、ルーミアはいきなりぱくりと串に被りつくと、「熱っ」と口を押さえる。

その光景に苦笑しながら、慧音も出された兔肉を一口齧った。あまり関係のない話ではあるが、兎は昔は鳥として扱われ、肉食が禁止された僧たちがこっそりと食べていたそうだ。味もなんとなく鳥肉に似ている。

「んー、むぐ。ふあむ……んぐ……」

「ルーミアの食べてるのは、何の肉だ？」

慧音が問うと、ルーミアは口をもぐもぐと動かし咀嚼しながら、何やらニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「さあねー。私はお肉だったら何でも好きよ？ ……一番好きなのは人間のお肉だけど」

何やら含みのある言葉に、慧音が僅かに眉を寄せる。阿求の顔もわずかに引きつった。

「私は人間を生のまま、齧りついて食べるわけじゃないよ。ちゃんと捌いて調理してー、」

やっぱり焼いて食べるのが一番おいしいわー。鹿や猪も、……人の肉もね。

そういつて笑うルーミアの表情は不気味で、いつもの脳天気そうな彼女とは違って見える。

「コラコラ、このお肉は猪の肉よ」

割り込むようにミステリアが声をかけた。ミステリアだって人喰いの妖怪だが、場を弁えることくらいできる。彼女だって、自分の食事中に延々と鳥肉の捌き方や肉の味について語られたら困る。というか引く。

「そ、そうなんですか……」

どこかほっとした様子で、阿求がため息を吐いた。ルーミアがくすくすと笑う。

「妖怪は人間を襲って、怖がらせるのが仕事だもん」

「あまり脅かしすぎると、巫女が出てきて退治されてしまうぞ。ほどこほどにしておくんだな」

「動物を食べる人間。その人間を襲う妖怪も、博麗の巫女には勝てないってことですね」

むー、とルーミアがむくれる。

しし食った報い、という諺がある。禁を犯して一時的にいい思いをして、後で必ずそれ相応の悪い報いを受けるという意味だ。

人里で人間を襲ったり、スペルカードルールを破ってしまえば、簡単に人を狩ることができるだろう。でも、それはしない。ルールを守るからこそ、ルールに守られていることぐらいはルーミアだつて理解している。

慧音も阿求も、そんなルーミアの様子を見て可笑しそうに笑う。

結局、その日の屋台には、酔っ払いたちの騒ぎ声とミステリアの歌声が夜遅くまで響いていた。

東方究極合成獣 ミステリア&ルーミア

夜の静けさを打ち消す悲鳴が響く。

二つの小柄な人間大の影が落ち葉を踏みしめ小石を蹴飛ばし、人間ではまともに走れそうにない山道を全力で駆ける。いや、飛ぶ。

その速さは到底、人間が出せるものではない。そして二人は人間ではなかった。

「はあ、はあ、はあ……！ な、なんなのよアレ！？ 何！？」

「し、知らない知らないー！ 私に聞かないでー！」

それは、ミステリアとルーミアの二人だった。息を切らし、梢に服をひっかけ、手足を擦り剥きながら無我夢中で逃げる。逃げていく。

ていた。

「このッ!」「あっちに行け!」

ばつと後ろを振り返り、ミステリアとルーミアの二人が示し合わせたかのようにいつもの弾幕を放つ。いや、正確には弾幕ではない。弾幕とは、スペルカードルールの中で弾幕ごっこを行うためのもの。美しさを競い合うための手段。だからこれはスペルカードの弾幕とは呼べない。ただ相手を傷つけ、排除することだけを目的としたそれには、華麗さなど微塵もない。

ミステリアとルーミア、二人分の攻撃がきゆうきよくキマイラに叩きこまれ、その衝撃で周囲が弾けた。

「……やったの?」

直後、土煙の中からきゆうきよくキマイラが口を大きく開けた状態で飛び出し、それはルーミアの真横でガチンツと閉じられた。

「ひいい!」

一歩ずれていればこの怪物に喰われていたことに気づき、ルーミアの顔が恐怖に歪む。

『グルルルル……!』

唸り声を上げて、小さいけれど、ギラギラと光る目がこちらを見ている。ついでに頭のひよこもこちらを見ている。

妙に愛嬌のある外見が、今はひたすら怖く見えた。

「に、逃げなきゃ……」

「早く！」

人間を襲う側の妖怪が、自分が襲われるなんて考えもしなかった。人を食べる自分たちが人間に退治されることはあっても、あんな怪物に食べられるなんて……！？

恐怖に強張る身体が、その足をもつれさせた。

「あうっ……」

その間にも、きゆうきよくキマイラは着実に距離を詰めてくる。唸り声のような音が近くなる。背中小さな翼が伸ばされ、顔の半分以上もある大きな口がぱっくりと開かれる。

『ギヤオオオオオオオオオオ！！』

ルーミアの視界が赤一色に染まり……、

「で、こうバクつと襲いかかって来たのよ！ バクつと！」

夜の幻想郷、魔法の森の近く。

その日、八目鰻の屋台では、客としてではなく店員として働くルミアの姿があった。

一見すると、何か珍しい妖獣に襲われた話を誇張して大げさに話しているようにも見えるのだが、横でうんうんと同意するミスティアを見る限り本当のことらしい。

八目鰻をもしかもしゃと齧りながら、森近霖之助は静かに相槌を打った。

「間一髪で逃げ出せたから良かったけど、もし運が悪ければ食べられてたかも……」

「もう、本当に怖かったわー。……アイツが退治されるまで、しばらく人間は襲わなくてもいいや」

あのルミアがそんなことを言うとは……よっぽど怖かったらしい。

ということは、この屋台で働くのも代わりの食事を得るために、ということなのだろうか。

「巫女に退治を頼もうかしら」

「それはいいが、君たちまで一緒に退治される可能性を忘れないほうがいいね」

それがこのざまである。

「博麗の巫女は中立でなければならぬ。君たちの言う、その赤い怪物とやらが人里を襲ったり、幻想郷のバランスを崩しかけるか異変を起こす。あるいは幻想郷そのものに害をなさない限り霊夢は動

かないだろうね。

特に、単なる妖怪同士のいざこざに介入することはないと思うよ」

全ての束縛から逃れ、空に浮かぶ彼女。何物も拒まない代わりに、深入りすることもない。あるいは、単に興味がないだけなのか……。積極的に関わるとすれば、それは魔理沙だろう。彼女は異変や、異変とも呼べない小さな事件にも首を突っ込みたがる。彼女が事件を起こしているとも言えるのかもしれない。

「あれは絶対に妖怪なんかじゃないわよ！　なんというか、こっ……上手く言えないけど違うの！」

ばんばんつと台を叩いて抗議するミスティアの様子に、霖之助は小さくため息を吐く。

そしてグラスに残ったぐいっと酒を呑みほすと、何やら神妙な顔を作った。

「ひょつとしたら……それは外の世界の道具なのかもしれない」

その一言に、ルーミアとミスティアはびっくりした様子で反論した。

「道具って……？　アイツはどう見ても生き物だったけど」

「そうよ、おかしいわ」

だが、霖之助は涼しい顔で、「分かってないなあ」と言わんばかりに首を横に振った。

「そうだね。そんな道具があるなんて、普通は誰も本気にしないだろう。だが、僕には信じさせるだけの根拠がある」

霖之助の言い分はこうだった。

今まで彼が拾ってきた外の世界の道具は、幻想郷では信じられない様な物も作り出されているのだ。例えばつい最近、人里に永住することを決めた変わり者の外来人が里の妖怪退治屋に連れられて香霖堂にやって来た。何でも、手元にあると元の世界への未練になるとかで。外の道具を買い取るか引き取って欲しいとのことだった。

その時に、外の世界の道具や技術について少しでも話をしたのだ。腰の低い人物で、終始穏やかに話をする事ができた。残念なことに、その人物も道具の使い方は知っていてもその原理や仕組みについての知識を持つてはいなかったのだが、いくつかの興味深い話も聞くことができた。

そして自説や考察も織り交ぜた結果出したのは、やはり外の世界には恐ろしい力を持った道具が存在しているのだという結論だった。「君たちの話だと、その赤い怪物の背中にはボタンが付いていたらしいね」

それも、僕が外の世界の道具だと思つた根拠の一つだよ。外の世界の道具には、ボタンやスイッチが付いているものが少なくない。ルーミアとミスティアは、ごくりと唾を飲み込みながら、霖之助の話に聞き入っている。

「これはひよつとしたら……妖怪を襲う道具かいぶつが幻想郷に現れたという事かもしれない」

草や木の実を虫が食べる。その虫をカエルが食べ、カエルを蛇が食べる。その蛇を鳥が食べ、鳥を獣や人間が食べる。獣を人間が食べ、その人間を妖怪である君たちが食べてしまう。

これは幻想郷の食物連鎖の図式だ。最後には、その妖怪は巫女に

退治されるのがお約束なのだが。

「最近の幻想郷は本当に妖怪が増えてきたね。ならば、その妖怪を襲う怪物が外の世界から現れたのだとしたら……」

もったいぶって怖がらせるような霖之助の語り口。月明かりにぎらりと反射する眼鏡のせいで、奥の瞳が見えないのがなんか怖い。

「あわわわ……」

「どどどどどどじょうじ……」

ルーミアとミスティアの二人はすっかり本気にして怖がってしまった。お互いに抱き合うようにして手を取り合って震えている。それを打ち消すように、霖之助はぱつと顔を上げると、あっけらかんとした口調で言った。

「いや。でもこれは僕の想像でしかないから……って聞いてないか」
酒に酔ってしまったこともあり、我を忘れてずいぶんと熱心に語ってしまった。自分で自分が何を言ったのかもよく覚えていないだろう。

「ま、それじゃあ僕はこの辺で……」

往々にして飛躍しすぎた理論を展開するのは霖之助の悪い癖なのだが、そんなことを彼女たちが知るはずもない。帰ろうとする霖之助の声も聞いていないようだった。

最後の客であった霖之助が帰ってしまい、辺りには静寂が戻る。聞こえてくるのは、虫たちの鳴き声や風に揺れる木の葉の奏でる音だけだ。

「し、しばらくは大人しくしていきましょうか」
「う、うん。そーだねー。……それまでの間、ここで働かせてちょうだい」

その後、きゅうきよくキマイラが三月精に倒されるまでの間、人も襲わず、人里の中で屋台を出して働くミスティアとルーミアの姿があったそうなの。

……少女祈禱中。

ルーミア&ミステリア・ローレライ（後書き）

巷に溢れる転生系のオリ主。

閻魔、あるいは神様の下で100年間働いて罪を清めて、転生後の肉体も用意して貰ってから転生するSSがあってもいいと思う。

特に転生が公式に存在してる東方だと特に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9402u/>

東方究極合成獣

2011年10月9日11時59分発行